東京薬科大学新聞

発行所
東京薬科大学
新聞会
責任者
宮原勇人

学生大会議案

議案書配布にさきがけて内容を紹介

現在発表されている平成二年度後期定例学生大会の議案書を要約すると以下の通りである。

一・厚生施設（新談話室）問題

自治会では夏休みに着工予定だった工事が始まらなかったので、その理由を学生部に問い合わせたところ「建築士の推原さんの身内の事情」ということだった。工事開始は十二月一日、後期は平成三年五月末日までの予定。内装については学生にアンケートを行って、学生に使いやすい厚生施設になるべく働きかけていく。

二・学内歴について

平成三年度の行事日程は今年度と同様、前期試験が夏休み前に行われること、後期は九月中旬から始まり、後期試験は入学試験の前に行われる事が現時点で決定している。その他細かい日程については、現在大学側で制作中である。

三・自治会費改正について

予算委員会では来年度から在学生の自治会費を千円値上げして年会費を四千五百円とすることを提案する。

四・交通問題

学生自治会に貸与されている学部学生駐車場は、現在違反駐車激増等の問題を抱えている。この状況を改善すべく利用者の学生には、駐車許可証に記載された車両以外の車をしないこと、夜間駐車を認めないこと、学部学生駐車場内では必ず徐行運転すること、駐車場内では各自が責任を持って管理することを徹底して頂きたい。

執行委員会の平成三年度駐車許可証の発行者の選定基準は、身体に障害を持つ者を優先する、交通の便の特に悪い者、自動車利用と他の交通機関の利用による通学の時間差が大きいものを優先するなどである。

また、駐車許可証交付申請の有資格者は、大学が行う交通安全講習会に出席し、前年度悪質な違反などを行っていない、そして原則的に

・大学より半径二㎞以上
・大学より半径四十㎞以内で運転時間が一時間三十分を越えない

・鉄道、バス等の駅及びバス停の付近の住人ではない

等の条件を満たしていなければならない。

なお、新学部学生駐車場が完成した。収容台数は七十三台であり、学生自治会では大学院生と学部学生生駐車スペースの割り振りを今後の話し合いにより決定していく方針である。

後期学生大会議案

1）厚生施設問題について
2）学内歴について
3）自治会費改訂問題について
4）交通問題について
5）新歓祭実行委員会について
6）学長任用規定について
7）自治委員会

五・新歓祭実行委員会について

平成三年度新歓祭実行委員会は平成二年十月二十五日付けで発足した。当委員は上級生の主催する行事を通して新入生の不安を取り除き、彼らが上級生と共にこれからの学生生活を楽しく送れるようにすることを目的としている。

六・学長任用規定について

学長選出規定の改正で、学生に直接関係する部分を報告して承認を得る。従来まで学長選出時に学生全員で信任・不信任投票をし、信任をうける、あるいは投票を学生側が棄権すると、その結果を四年間有効としていた。改正後は学長が就任して二年目以降から学生の三分の一以上の署名でリコール請求の投票を行える、としたもの。

七・自治委員会

昨年度までの学生の意見と無関係の活動を改め、学生の意志を尊重して活動を進めていく。後期学生大会に際して当委員会は、学生個々との意見、提案、情報の頻繁な交換や学内施設の諸問題の改善解消、交通問題の改善解消、学生談話室及び新厚生施設等の項目を重視して活動する予定である。

男子バドミ 薬連を制覇

女子レギュラー戦も

関東薬学連のバドミントン新人戦、レギュラー戦は十一月三日に麻生スポーツセンター、十八日に北里大学体育館にて決勝を行い、東京薬科大学男子バドミントン部がその両方とも優勝した。

レギュラー戦は一チームでシングルスを三戦（S1、S2、S3）とダブルスを二戦（D1、D2）の計五戦を行い、そのうち三戦を勝ったチームの勝利とする方式。東薬男子Aチーム（菅谷、小林、国分、土屋、本橋）は準決勝で星薬科大と、決勝で東邦大と対戦。星薬戦ではS1をとられたものの続くD1、D2とS2を取って3－1で勝ち、東邦とはS1、D1、S2を取り3－1で勝利している。

新人戦も一チームでシングルス二戦（S1、S2）とダブルス一戦（D1）の計三戦を行い、うち二戦を取ったチームが勝利する方式で、東薬男子チーム（大塚、加藤、柴田）は準決勝で昭和薬科大、決勝でまたも東邦大と対戦した。対昭薬戦ではS1を取られたがD1、S2を取り返し2－1、因縁の東邦とはS1、S2を取り2－1で優勝を果たした。

今年最後の公式戦の、特に新人戦に優勝したことは来年も「強いバドミントン部」であることを期待させる。

また、レギュラー戦では東薬女子チーム（渡辺、三好、津田、藤原、高柳）も準決勝を星薬、決勝を東邦と戦って対星薬3－2、対東邦3－1で優勝しており、今回は薬連新人戦男子、レギュラー戦男子、女子の三つを制覇して東薬大の強さを見せつけた。

東京の海と空を訪ねて

―サンシャイン60―

池袋のサンシャイン60。ここには忙しい日常では味わえない快い幻想的な刺激がたくさん詰まっている。

まずは国際水族館。人々はサンゴ礁の熱帯魚の鮮やかさに目を奪われ、太平洋の魚の大水槽の前でのびのびとした魚の本来の姿に驚く。そしてアマゾンを模した水槽のスコールや雷といった特殊効果、ウニやヒトデに直に触れることができる岩場のある浅い水槽に感心したりもする。

中でも子供達に人気のあったのは、楽しげに泳ぐバンダイルカやユーモラスなミズダコなど比較的大きな生き物で、小さな可愛い生き物は女性に人気があるようだった。しかし何と言っても一番人気はラッコである。誰もが彼らのあまりの愛らしさの前に思わず足を止めてじっと見入ってしまう。そのため水槽の前には三段の階段が設置されているほど。先頃赤ちゃんが誕生し、その人気は更にうなぎ昇りである。

まだ乳飲み子である赤ちゃんは形容し難い可愛らしさで、それを見ただけの価値は場料を払っただけの価値はあろう。この子が成長してしまう前にぜひ一度ここに来るべきだと断言したい。

次はプラネタリウム。球形の天井全面のスクリーンで上映される。ギリシャ神話の物語を織り混ぜて季節の星座を紹介する形式は、余り星に興味を抱いていなかった我々さえも十分に楽しませてじっと見入ってしまう。ちなみに今回の物語はペルセウスの英雄伝。十二月二日までなので興味のある方は即、池袋に飛んで頂きたい。尚、次回作の上映は十二月九日からなのでご注意を。

そして地上二千メートルの展望台。よく晴れ空気の澄んだ日ならば関東一円を手にいれたような大きな満足が得られる。日が落ちれば雨の日でもあっても大都市東京の夜景が美しい大パノラマとして眼下に広がり、サンシャインめぐりの締めくくりをスマートに決められる。

参考までにこれら全てを一度に巡ると二千六百五十円という入場料をとられるが、ここにはそれだけのモノがあるので新宿あたりに行ったついでに一つずつでものぞいてみて頂きたい。

企画会始まる

新歓祭実行委員会

十一月十五日から平成三年度の新歓祭の企画会が始まった。新歓祭は新入生が早く大学に馴れる為の行事であるべく多くの人が参加しまた充分に楽しんで欲しい、と実行委員は一丸となって頑張っている。また企画側は今年度のテーマを「新たなスタートをさがして」に設定し、新歓キャンプの日程（四月一日から三日）も既に決定した。

今年度の新歓祭実行委員長である尾池康之氏は次のように語っている。「幾多の不安と期待を抱えて入学してくる新入生の不安を解消し、期待をかなえられ得る新歓祭にしたいと思う」

実行委員会の今後の活躍に期待したい。

薬味

全天で最も明るい星「シリウス」が、夜半近くに東の空に顔を出すようになった。オオイヌ座を構成する星の一つで、明度はマイナス一・六等級。一番の明るさの名はシリウスの二十倍の明るさ。ギリシア語のセイリオスが輝いているもの、焼き字がすもの。ローマ文字にすると▽シリウスは音写したもの。この星の鋭い輝きを想像させる▽約五千年前の神格化し、日の出直前にこの星が昇ってくるのが認められる日を年始と定めたところ、毎年のナイル川が増水し始め、やがて氾濫する前兆となったからであった。「エジプトのナイル」川のすべての生産のもとになる農業を支えてきた。

シリウスを中心に表現した「大星」「青星」「島根県」が最も多いようだ。「南の白」と呼ばれるのもある。▽またオリオン座の三つ星を結んだ線分を、左下方に延長した比較的見つけ易い。冬の澄んだ夜空にきらびやかに輝くシリウスを自分の思いのままに眺めるのも思いのでは。

（毛塚重行）

創立百十周年記念行事

先日、本学の創立百十周年を記念した行事が催された。その模様および同時に行われた正式書式の決定、造形演奏など記年行事の内容をレポートする。

今月二十一日に教育棟三号館四階の大講義室において本学の創立百十周年を記念する行事が執り行われた。三時開場、三時半開演であり、学部学生の数こそあまり多くはなかったもののおよそ四百人の出席者の熱気と緊張感で会場はいっぱいであった。会場に向かう三号館のエレベーターは混雑し、学生には階段を使う人も数多く見られた。会場では本学の理事長の永井国太郎氏の挨拶があり、それによると今回の行事はちょうど百年もしくは百五十年といった様な大きな区切りではなく百十周年といった半端なものであったため内祝いという形式で行われたということである。確かに小規模ではあったが格式高いものであったと言えよう。今回、この百十周年にあたってもう一つの動きがあった。この機会に本学の正式書形を決定した、ということである。これは上欄にあるものだが、本学の創立者である福井藩士藤田正方の「東京薬学校」という直筆の文字を最新の模写技術で解析してつくったものである。これ以降正式の書類にはこの書形を用いることとなった。また永井理事長はこの挨拶の中で「わが国の薬科大学の代表であることを認識しよう」という言葉を新理事会の合言葉であると語った。

理事長の挨拶に次いで安達流の主宰である安達瞳子先生による造形演奏「花手前・燃（もえる）」が厳かに始められた。この「燃」には「薬学花咲け、薬学燃えよ」といった意味が含められている。大鼓と笛の音の奏でられる中で色鮮やかなカエデやヒメコマツなどが次々と白木の器に生けられた。朱色と緑色が見事に背景に山々を描き出していた。途中、ステージから女性が転落するというアクシデントこそあったものの拍手喝采をもって演奏は十五分程で終了した。しかし、しばらくしてもまだその美しさの余韻に会場を去らない人も多かった。

ここで百十周年を迎えた本学の歴史を振り返ってみたいと思う。

本学は明治十三年に東京薬舗学校として東京市本所区亀沢町に創立された。同三十一年、上野桜木町に移転、大正六年に東京薬学専門学校となる。昭和三年には淀橋区柏木に移転し、翌年桜木町の旧校舎には上野女子薬学校が設立された。同六年には女子部とし、東京薬学専門学校と併せて昭和二十四年に東京薬科大学となった。この後大学院薬学専攻設置（同三十八年）、製薬学科増設（男子部のみ、同三十九年）、衛生薬学科増設・大学院薬学専攻設置（同四十年）を経て同五十一年にここ八王子に全学を移転し同五十六年には大学院医療薬学専攻を設置して今に到る。

ちなみに安達瞳子先生のプロフィールは次の様である。安達瞳子…昭和十一年六月二十二日生まれ。学習院女子高等科卒。父は安達流挿花初代家元安達潮花。意見の相違を理由に、四十三年に独立して「安達瞳子制作室」を設立。四十八年花芸安達流を主宰。六十五年安達式を合流。六十一年、新本部「花芸の館」を建設。

著書に「花芸への道」があるので興味のある人は読んでみてはいかがだろうか。

東京薬科大學

「自然破壊」「環境汚染」ということが最近の紙面を賑わせている。また「年間に何種類の動物が絶滅したのは一体何々が滅びの危機に頻している」等この手の物を挙げると枚挙に暇が無い。

これらの議論は文明が地球の自然を破壊しているとか、地球の自然は文明の侵略に耐えられないといった物や人類のためにいくことは許されない、人間に生命を滅ぼす権利はない等文明と自然を対立もしくは対等に扱った物、環境や種の滅亡を道義的、宗教的に扱っているものが多いように感じられる。

文明と自然を区別する点は人間の手によるか否かである。が、はたして区別することにどのような意義があるのだろうか。自然の一部として発生した人間が築いた文明も自然の一形態ではないか。文明が自然の外にあり対立していると言うのは人間の思い上がりにほかならない。環境破壊がいくら進もうとそれは自然形態の変遷に過ぎない。人類があるのだ。

論説

自然における人間の位置を考える

（矢部健一）

いくら暴れようと自然は破れたりする程弱くない。

また人類の進出により変化した環境に適応できなくなった種属が滅んでいくことは至極当然の事である。生存競争という平等の場で勝負で破れた種は消えていくだけの事である。かつて植物はその光合成能力により大量の酸素をまき散らし、当時の生命の大半を占めていた嫌気性の種族のほとんどを滅ぼした。強者は弱者を滅ぼす権利を持っているのである。人間の利益のためならば生物をいくら殺しても構わない。他の生物に慈悲をかけてやらねばならないと思うのも人間は特別であるという思い込みからである。

いままで書いてきたことは産業廃棄物をまき散らすことや無差別な殺生を進めているわけではない。重要な点は人類やその文明が自然の一形態である以上弱者は強者に支配されるという法則の例外ではないということである。最強者であるはずの自然そのものの流れに沿わなくなれば人類はいとも簡単に地球上から消されてしまうことであろう。人類を自然界の檜舞台に出させたのはその環境なのだからどれだけ他の生物を殺そうが構わない。だが力にかまけて何も考えずにそれらを行えば人間にとっての良好な環境が失われ人間自然の中の人間を生かしておくキャパシティーが減っていく。自然に人間を生かしておくキャパシティーがいくら自然の流れに立ち向かおうともがこうと決して勝つことはできない。それでは人類が滅びの道を歩むことは明白である。

警告

今、地球が危ない！

昨今ゴミ問題がマスメディア等で多く取り上げられるようになった。最初は一部の知識人の警鐘から始まりテレビ等を通じて一般の人達の間でゴミ処理が身近な問題であると考えられるようになった。

ゴミ問題には三つの主原因がある。まずゴミ全体量の増大がある。それは皮肉にも社会人口の増大と生活の向上によるところが大きい。人口の増大は避けられない事ではあるが豊かさによって物の大切さを考えない傾向は良いことではない。多少遅すぎる感もあるが今からでも改善への自覚を持つべきだろう。

二番目にゴミの内に再生または焼却の困難な物質（主としてプラスティック製品の有毒物）が以前と比べて激増している点が挙げられる。プラスティック製品は利点である丈夫さ、低コスト、加工の易さまた清潔である事から安全性を売り文句としている食品業界等の企業に使われている。再利用もし難くまた燃焼させると有毒ガスが発生し長期間放置しても自然分解しないという難点にも関わらず今までは問題点を省みず利点のみを追求した結果大量のプラスティック製品のゴミの山が築き上げられた。近頃になって少しずつ無駄と思われるパッケージを省いたり紙製品の再利用や自然分解のプラスティック製品を試みられている。プラスティック製品を全く使用しなくなるのは不可能に近いが良識の許す範囲内での使用にとどめるのは可能であろう。

三番目として処理場の不足と採算に合わない事が挙げられるが本来これらの問題は国土に多い人口という点に加え異常とも言える昨今のゴミ全体量の増加もあり一概には公共機関の不手際を責めることもできないだろう。以上の原因は人間がより良い生活を営もうとして新しい便利なものを使いたがり難点を後回しにしたからである。その為生じた問題は一般の人達の目の前に突きつけられたために遅ればせながら自衛行動としてゴミ問題を考え始めたのだ。

ゴミ問題のみならず環境破壊の根本は人の怠惰である。強力だからと言って殺虫剤にダイオキシンを、効率がいいからと言ってクーラーにフロンガスを、必要だからと言って後を考えず木を伐採する、不必要だからと言って有毒物をそのまま排出する、そのほか枚挙に暇がない程人間の理由は今までは発展のための発展をしてきたからだ。そのために今までいる。奇形児、オゾン層破壊、地球温暖化、放射線の被爆等である。行った者とその子供ではない、ただ自然の報復ではない、ただ自らに向かって振り下ろした剣が自らと自然を傷つけているのである。

幸いに高度経済成長がまさわった時である。無思慮の結果が現れている時でもある。次世代の世界を考えるべき時なのではないか。

かぜにご用心

秋ももう終盤。朝晩も、ぐっと冷え込み始めた今日この頃。皆さんの体調はいかがでしょうか。熱っぽいな？と感じたら要注意。今、大学内では風邪が流行し始めている模様です。

現在、保健室の一日当りの利用者数は、二十ないし三十人程度ですが、その中でも風邪による来室が急増中。保健室では、今後も増加を続け、利用者が四十人前後まで増えるだろうと予想しています。

保健の先生によると、「風邪にかかる一番の原因は、日頃の生活の不摂生からきています。深夜までの暴飲・暴食を止めることが一番です。」とのこと。

風邪に対する最良の方法はまず予防することです。それには、規則正しい生活をすることが大切です。

自分の体の管理が出来ないのに、他人の健康に関わる薬学の仕事は出来ないのではないでしょうか。

薬美展

十二月十三日（木）から十六日（日）にかけて東薬大美術部による展覧会が開かれることになった。

尚、会場は京王線北野駅前の北野タウンビル内フランツの七階。入場は無料なので誰でも気軽に足を運んで彼らがキャンバスに己の全てをぶつけた力作をゆっくり鑑賞していって欲しい。

編集後記

Ⓟ人と会う約束をしました。約束は八時に豊田です。今日は新聞の印刷日。新聞が出来ると人時半。印刷はまだ終わりません。（さあしゃ）

㊍部室棟からバス停まで四十五分……そんな私はフォーナー。そうそう友人のストレンジャーによろしく伝えておいてくれたまえ。（異邦人）

★眠いし、行数増えるし、頭くらくらするしで、ああ世界は不透明だ……。（ALC）

▼今日は今さらながら授業さぼってゴーストをみてきました。泣きました。でも新聞が今日発行なので遊ばないですぐに学校に帰って泣きたいです。（ムーミン）

¥印刷機の不調で寝る時間もない。それでも試験は受けねばなりません（鳥龍茶一茶）